

一五 鎌倉時代に記された『禁秘抄』では、『枕草子』の記述を雪山の初例として扱っており、この章段が後世によく伝わっていたことを示している。

一六 目崎徳衛「王朝の雪」（『平安時代の歴史と文学 歴史編』山中裕編一九八一年 吉川弘文館 所収）に詳しい解説がある。

一七 三卷本勅物が引く『小右記』に、「入内事無所見、若密議敷」とある。藤原実資が一月七日に職御曹司を訪問した時、中宮定子が不在だったため、内裏参入が秘密裏に行われたのではないかと推測する記述である。

一八 池田亀鑑『全講枕草子』（一九六三年 至文堂）に記され、以来、度々論じられてきた。

一九 津島知明『動態としての枕草子』（二〇〇五年 おうふう）に言及がある。

二〇 津島氏（前掲注五）は、雪山の段の最終場面において、定子と清少納言の信頼関係の破綻が生じていると読む。本稿では、『枕草子』が描いてきた定子後宮世界の破綻という方向から読む。

二一 定子の唐物趣味については、河添房江『光源氏が愛した王朝ブランド品』（二〇〇八年 角川書店）に詳しく記述されている。

二二 『栄花物語』本文は『新編日本古典文学全集』（小学館）による。

二三 最初の一首は『後拾遺集』哀傷巻の巻頭に、二首目もそれに続いて採録されている。『後拾遺集』の伝本によっては三首目を載せるものもある。

本稿は、二〇一四年十二月十三日に本学で開催した市民公開講座「文芸世界への招待状―四季物語…冬の章 王朝文学の冬の風景―清少納言の見た雪」での講演内容を踏まえ、その後、さらに考察を進めて論文に発展させたものである。

\* The snow scene in Makura no Soshi: A Landscape That Gave Birth to a Literary Work

\*\* Etsuko AKAMA 十文字学園女子大学人間生活学部文芸文化学科 (Department of Literature and Culture, Faculty of Human Life, Jumonji University)

キーワード 枕草子 四季 後宮文化 雪 中宮定子

- 五 「大雪」を描く『枕草子』—雪と中宮と私—という肖像—(『日本文学』二〇一三年五月)／『枕草子論究—日記回想段の(現実)構成』二〇一四年 翰林書房 所収)
- 六 小森潔氏は、初出仕を描く当該章段の前半について、清少納言の新参者意識が主家賛美の方法として機能していることを指摘し、さらに章段全体に枕草子の始発を読み取る。(『枕草子の始発—「宮にはじめてまゐりたるころ」の段をめぐる』『むらさき』一九九〇年十二月)／『枕草子 逸脱のまなざし』一九九八年 笠間書院 所収)
- 七 永井和子氏は、「宮廷という異文化との出会いの衝撃を里人として意識化し、選択的に明示したものと論述する。(『清少納言—基点としての「宮にはじめてまゐりたるころ」(『国文学 解釈と鑑賞』二〇〇〇年八月)
- 八 宮中以外の雪では、「あはれなるもの」(二一五段)として挙げられた「山里の雪」、「正月に寺に籠りたるは、いみじう寒く、雪がちに氷りたるこそをかしけれ」(二一六段)がある。
- 九 中田幸司氏は、冒頭段の最後を「わろし」と評することについて、作者の心情に内在する「負の要素」を読み取る。(『枕草子』「春はあけぼの」を学ぶ—清少納言の叙述感覚—(『専修大学附属高等学校』紀要』20 一九九九年三月)
- 一〇 中島和歌子氏は、清少納言への評価は、白詩を利用した定子の問い掛けの意味を瞬時に判断して応じた機転に対するものとする。(『枕草子「香炉峯の雪」の段の解釈をめぐる—白詩受容の一端—』『国文学研究ノート』一九九一年三月) 本稿ではそのような機転も含めて、漢詩受容を積極的に勧める定子後宮文化を評価したものと考える。
- 二 この句は『和漢朗詠集』下巻の「交友」の詩群にも採録され、四季折々の風趣美を表す「月雪花」の語の由来となっている。
- 三 大江維時は、醍醐・朱雀・村上三朝の侍読を務めた承平・天曆期を代表する漢学者。この漢詩は『和漢朗詠集』春上巻の「梅」の次に位置する「柳」の詩群に収められている。「粉粧」は白粉で化粧したような白梅の花を指す。本文は『新編日本古典文学全集』による。
- 四 『枕草子』に村上朝の事例を引いたものとしては、清涼殿で中宮定子が語った宣耀殿女御芳子の逸話(二二一段)が有名で、定子が村上朝を文化的模範としていたことがわかる。
- 五 矢作武氏は「清少納言にとって白氏文集・朗詠の詩句・章句・類書・雑纂等は自らの文学の新しい方法発見への決定的な跳躍台になったといえるのではなからうか」と指摘する。(『枕草子の源泉—中国文学』(『枕草子講座(四)』一九七六年 有精堂 所収) たとえば、「頭の中將のすずるなるそら言を聞きて」(七八段)でも、斉信からの白詩の返事に漢句を返すことを躊躇した清少納言が和歌の下句を返して評判になった話が語られている。
- 六 永井氏(前掲注七)は『枕草子』の描く定子について、「単なる概念的な中宮ではなく、更に人間としての定子の、自らの才幹によって立つ姿を造型した」と指摘される。
- 七 『日記』久安二年(一一四七)十二月二十日条に、藤原頼長が一日半をかけて高さ一丈八尺(約五、五メートル)もの雪山を制作した記録がある。『枕草子』の雪山はそれほどではなかったにしても、人の背丈以上はあっただろう。
- 八 金内仁志「枕草子『雪山』の段について」(『立教高等学校研究紀要』一九八二年十二月)が提出され、以降も様々に論じられてきた。金内氏は当該章段前半に登場する「常陸の介」についても、一条天皇と定子の連絡役である右近の内侍を登場させる役割を担っていたと考証し、章段全体に定子入内を暗示させる構成を読む。本稿もその説に概ね賛同するものである。

雪の降りしきる日だった。定子の遺骸は六波羅蜜寺に安置された後、十二月二十七日に洛南の葬送地鳥辺野に埋葬された。ふたたび『栄花物語』から掲げよう。

その夜になりぬれば、黄金づくりの御糸毛の御車にておはしまさせたまふ。帥殿よりはじめ、さるべき殿ばらみな仕うまつらせたまへり。今宵しも雪いみじう降りて、おはしますべき屋もみな降り埋みたり。おはしまし着きて払はせたまひて、内の御しつらひあべき事どもせせたまふ。やがて御車をかき下ろさせたまひて、それながらおはします。今はまかだたまふとて、殿ばら、明順、道順などいふ人々も、いみじう泣きまどふ。をりしも雪、片時におはし所も見えずなりぬれば、帥殿、

誰もみな消えのこるべき身ならねどゆき隠れぬる君ぞ悲しき中納言、

白雪の降りつむ野辺は跡絶えていづくをはかと君をたづねむ僧都の君、

故里にゆきも帰らで君とともに同じ野辺にてやがて消えなんなどのたまふも、いみじう悲し。……

暁にみな人々帰りたまひて、宮にはさぶらふ人々待ち迎へたる気色、いとことわりに見えたり。おはしまし所、雪のかきたれ降るに、うちかへりみつつこなたさまにおはせし御心地ども、いと悲しく思されたり。

金色に装飾された、いわば靈柩車に乗せられ、定子の遺骸は運ばれていった。定子の親族の男性たちが車に付き添って現地に赴き、御靈屋に降り積もった雪を払って葬送の作法を執り行う。葬儀が終わると、定子の母方のおじである明順、道順たちはこらえきれずに涙を流し、同母兄弟の帥殿伊周、中納言隆家、僧都隆円が、それぞれ和歌を詠んだ。兄弟たちの和歌には、誰よりも早く来世へ旅立った定子への惜別の思いと共に、雪が詠み込まれている。

『栄花物語』によれば、その日は大雪で、特に山間の鳥辺野の地は深い雪に覆われたという。雪深い景色は定子を偲ぶ人々の心象風景そのものだった。去り際に、降雪で見えなくなっていく御靈屋を何度も振り返りつつ都に戻る人々、また、彼らが戻る暁まで一睡もせず待っていた三条宮の人々の、定子を恋い慕う気持ちが痛切に感じられる。清少納言も、葬送の当日に鳥辺野を思いやり、悲嘆にくれた人々の中にいたはずである。彼女は定子の御靈屋に降り積もる雪を思い浮かべながら、何を考えていただろうか。

『栄花物語』は物語としての脚色を加えて後に書かれた作品だが、定子の死が彼女の身近にいた人々に与えた衝撃の強さは想像に難くない。その中の一人だった清少納言は、どうしようもない無念の思いを定子に下命された『枕草子』の執筆完成に込め、定子の遺志を継ぐこととしたのではないだろうか。すなわち、『枕草子』に書かれなかった最後の雪景色、定子葬送の日の記憶は、書かれないことよって作品生成の原動力となったと考える。「春はあけぼの」に始まる『枕草子』は、まさしく冬の雪景色の中から生まれた作品だったと言えるだろう。

#### 注

- 一 田中新一氏は、春と秋の二元的四季観を持つ平安朝文学の中で、『枕草子』は例外であると指摘する。『平安朝文学に見る二元的四季観』（風間書房 一九九〇）
- 二 『枕草子』本文は『新編日本古典文学全集』（三巻本）による。また、本文検討にあたっては、適宜、能因本文も対照する。
- 三 『校本枕草子』俯卷二五頁に、「第四〇段・又一本」の本文として載る。

四 『枕草子』風土攻―（雪）の叙述と機能―（『平安宮廷文学と歌謡』二〇一二年 笠間書院 所収）

したのだが、それは大宰大貳だった源有国が中間擗取したためだとい  
う。その間の経緯を事細かく述べた定子は、問題解決のために高階明  
順を召問するよう行成に命じている。

この記事の日付は長保二年八月二十四日で、それは定子が第三子を  
懐妊し、二度目の三条宮滞在中に、一時、今内裏に参入した期間（八  
月八日～二十七日）のことになる。後の立場で直接行成に命じ、自分  
で事の始末をつけようとしたのは、彼女の身辺の雑事を処理する人物  
が居なかったからだと見ることもできるだろう。一方、そのような待  
遇にも屈することなく、果敢に行動する定子の人物像を窺うこともで  
きる。

この時、定子が宋の商人から買い上げた雑物は何だったのか。『枕  
草子』の栄華期の章段の中には、定子が華やかな唐物の衣装を纏う場  
面が度々描かれている。

宮は、白き御衣どもに、紅の唐綾をぞ上に奉りたる。御髪のかか  
らせたまへるなど、絵にかきたるをこそ、かかる事は見しに、う  
つつにはまだ知らぬを夢の心地ずる。〔二七七段〕

まだ、御裳、唐の御衣奉りながらおはしますぞいみじき。紅の御  
衣どもよろしからむやは。中に唐綾の柳の御衣、葡萄染の五重襲  
の織物に、赤色の唐の御衣、地摺の唐の薄物に象眼かさねたる御  
裳など奉りて、物の色などは、さらになべてのに似るべきやうも  
なし。〔二六〇段〕

紅梅襲の色目が好きだった定子は、清少納言と始めて対面した時も  
紅の唐綾を着用しており、また中関白家一同が勢揃いした積善寺供養  
の折には、身につけた衣装を唐物で揃えている<sup>三五</sup>。栄華期に最先端  
の舶来品を身に纏い、漢詩文を自在に操る先進的な後宮文化を創り上  
げていた定子は、その誇りを最後まで捨てず、自分の趣味に合う品物  
を取り寄せていたのではないだろうか。そんな定子だから、いよいよ

最期を迎える時には死後のことまで差配するべく遺言を残していた。  
『栄花物語』に記された遺詠も定子の手柄を示している<sup>三六</sup>。

宮は御手習をせさせたまひて、御帳の紐に結びつけさせたまへり  
けるを、今ぞ、御方々など取りて見たまひて、「このたびは限り  
のたびぞ、その後すべきやう」など書かせたまへり。いみじうあ  
はれなる御手習どもの、内裏わたりの御覧じきこしめすやうなど  
やと思しけるにやとぞ見ゆる。

よもすがら契りしことを忘れずは恋ひん涙の色ぞゆかしき  
また、

知る人もなき別れ路に今はとて心細くも急ぎたつかな

また、

煙とも雲ともならぬ身なりとも草葉の露をそれとながめよ

など、あはれなる事ども多く書かせたまへり。

一条天皇に宛てた一首目、死への覚悟を詠んだ二首目、土葬を示唆  
した三首目<sup>三七</sup>、それぞれの和歌からは、定子が死の間際まで自分の  
置かれた状況をしっかりと見つめ、今、何をすべきかを考えられる人  
だったことが伝わってくる。土葬を願ったのは、この世に残す皇子た  
ちの行く末を見守りたいと思ったからではないだろうか。そう考えた  
上で一首目を詠むと、一条天皇と夜もすがら契った事は、皇子即位の  
約束ではなかったかと思われてくる。

中関白家の長女として、一条天皇の第一后として、一族の未来を一  
身に背負って孤軍奮闘していた定子である。その責任感とプライドを  
最後まで保ち続け、現世に心を残して逝った人は、見届けられなかつ  
た皇子の皇位継承のためにできるだけの事をしようと考えたのではな  
いだろうか。その手段の一つとして、『枕草子』を完成させて公表し、  
中関白家の威光を世に示すよう清少納言に指示していた可能性もある  
だろう。

清少納言が雪の日に始めて出会った女主人との別れの時は、やはり

ろう。

この章段は、清少納言の賭けの成り行きに読者の興味を引きつけながら、清少納言が勝ちもせず負けもしないことで、最終的に定子と一条天皇に焦点を当てる構図になっている。『枕草子』では、定子の政治的立場が最も危うくなった長保年間の記事に、定子と天皇が同席する場面が集中的に描かれているが、それは正妃としての定子の立場を顕示するものと考えられる。同様に考えると、雪山の段の最終場面は、第一皇子の母としての定子の立場を示すものと読めるだろうか。

一方、雪山の賭けに勝利したはずの清少納言は、雪の歌を携え意気揚々と参内するという目論見を覆されてしまった。その場で定子から雪山除去の内情を知らされ、それが清少納言の立場を慮った行為だったとしても、定子の気持ちを受け入れる余裕を持ってない程落胆してしまふ。本来なら雪で小山を作り、村上朝の兵衛の蔵人が「雪月花の時」と答えた風雅を踏襲するはずだった。清新の風雅を実演して称賛するのが、『枕草子』が栄華期に描いてきた定子後宮のあるべき姿だった。しかし、それが実現しなかったということは、雪山が消えたことよって、それまで『枕草子』が発信してきた定子後宮文化が、もはや存在しないことを図らずも露呈してしまったことになる。

かつて年若い一条天皇を巻き込んで後宮文化を創り上げていた定子だったが、道長側の圧力が強まったこの時期は、天皇と会うことさえ難しくなっていた。職御曹司は後宮文化を標榜するのに相応しい場所ではない。つまり清少納言は賭けの最初の段階から、すでに実態として消失していた後宮文化を演出するための茶番を演じたことになる。それはまた、天皇と中宮が同席することが、歴史上においては勿論、『枕草子』の世界にとっても何物にも替え難い重大事となっていたことを示している。そのような綻びを抱えながら、村上朝の文化を継承する職御曹司の雪山は、宮廷文化の先導者としての定子の位置を示していた。さらにこの段が、第一皇子の母后となる定子の立場も誇

示していたと論じるためには、執筆時期の問題について考えねばなるまい。本稿では『枕草子』には定子崩御の後、敦康親王の皇位継承が可能であった期間に書かれた記事があると考えているが、詳しい考証は今後の課題としておきたい。

##### 五、鳥辺野に降り積もる雪

定子是一条天皇の三人目の御子を出産した直後、長保二年十二月十六日未明に二十四歳で崩じた。道長の栄華をテーマに歴史を物語る『栄花物語』に、定子崩御の記事を大きく扱っているのは、後世にまで続く世間一般の定子に対する愛惜の情を、編者が無視できなかったからに相違ない。定子はどのような人物だったのだろうか。

『枕草子』が描いた職御曹司時代の定子は、女房たちの背後で後宮統率者としての位置をしっかりと保っていた。しかし、当時、定子が置かれた歴史的状況を鑑みれば、没落した一族の後がかつての勢いを保てるはずがなく、『枕草子』には作品世界の演出が多分に施されているという見方でこれまで考察を進めてきた。しかし、本稿で清少納言初出仕から職御曹司時代までの雪に関わる記事を検討していく中で、改めて定子本人の存在を強く感じ、彼女は最後まで自ら積極的に行動する強い后だったのではないかと考えるようになった。

『枕草子』には記されない、亡くなる四ヵ月前の定子の様子を伝える記事が『権記』に載る。

皇后宮仰云、大商客仁聰在越前國之時、所令献之雜物代、以金下遣之間、仁聰目越前向太宰之後、令愁申於公家、以未給所進物直之由云々…（以下略…本文は『史料纂集』による）

ここには藤原行成が皇后定子から聞いた話の内容が長々と記されているが、あまり長いので後半の大部を省略した。概略は、宋の商人仁聰が、献上した雑物の代金の支払いが履行されていないと朝廷に愁訴

表3：雪山の賭と歴史背景

			年
			長徳四年 (九九八)
			二月中旬
			雪山制作・賭け開始
			二月二〇日
			降雪・白山に祈る
			二月三〇日
			常陸の介雪山に登る
			長保元年 (九九九)
			一月一日
			定子が新雪を除去
			一月三日
			定子参内
			一月七日
			清女里下がり
			一月二〇日
			清女出仕 一条と定子同席
			一月四日
			降雨・雪山確認
			一月五日
			雪山消失
			職御曹司
			定子
			職御曹司
			清女
			歴史的事項
			一三日 東三条院参内
			一六日 脩子、職曹司より参内
			一七日 脩子、登華殿にて着袴
			二〇日 東三条院退出
			七日 実資、職曹司訪問時に中宮不在
			一三日 改元・大赦
			二月九日 彰子着裳

十四日の夜中まで消え残っていた雪は、十五日の早朝、突如消失してしまっていた。実は、定子が取り除かせてしまったのである。なぜ、定子は雪山を除去してしまったのか。これについては、清少納言が一人勝ちして他の女房たちから恨まれないようにした定子の心遣いを読み取る説がある<sup>三三</sup>。二年前、清少納言は同僚女房たちから道長方のスパイ容疑をかけられ里に籠っていたという経歴があるので、後宮統率者としての定子が気を配ったとしても不思議ではない。ただ、そうだとしたら、本文の最後に定子への感謝の気持ちや称賛の評語が記されてよさそうなのに、それが無い<sup>三四</sup>。

その疑問を指摘し、〈入内成功譚〉としての本章段の考察を深めた津島知明氏は、雪山の賭けの日にちが定子入内の日を予想した（願った）ものと考えた。そして、正月一日に降った新雪を定子が取り除かせたのは、雪山消失の日すなわち入内の日のカウントダウンの逆行を阻止するためだったという。そのように解すると、雪山の賭けはその開始時点から、最も遠い日にちを予想した清少納言と定子との間に意思の疎通が生じていたことになろう<sup>三四</sup>。

本稿では、以下のように考える。雪山の賭けを発案した定子は、自らの内裏復帰をその余興にかけた。定子の意図を察した清少納言は、誰よりも遠い期日を掲げて、定子入内の願いを込めた。定子が一日に降った新雪を取り除いたのは、賭けの公正を期するためで、その時、定子の許には、すでに二日後の内裏参入実現の情報が入っていたのかもしれない。雪山にかけた願いは叶い、定子は内裏に参入したが、消え残った雪山とそれに執着する清少納言が取り残されることになった。

もし、そのまま清少納言の勝ち負けが語り続けられたなら、この章段は清少納言が主役の話になってしまっただろう。しかし、勝負の行方を定子が取り上げ、有耶無耶にしまったことで、清少納言の主役としての位置が失われた。内裏復帰を果たした定子は、賭けの真の勝者として、願いを託した雪山を自らの手で除去することにしたのだ

たことが語られていく<sup>一八</sup>。中関白家没落の史実を語らないとされる『枕草子』が、ある意味、雄弁に史実を主張している章段だといえる。栄華の時代に宮廷生活の風雅を演出していた雪景色が、ここではどのような役割を果たしているのだろうか。まずは、そもそも職御曹司に雪山が作られた理由について考えてみよう。

雪山が貴族の邸宅に作られ始めたのは平安中期からで、その初例は村上朝にあるとされる<sup>一九</sup>。『河海抄』（朝顔卷）の「雪まろばし」の注記には、『天曆御記』の逸文と見られる次の記事が載っている<sup>二〇</sup>。

応和三年閏十二月廿日令右衛門志飛鳥部常則堆雪作蓬萊山於女房小庭、今日功了、給常則及画所雑色役人三人禄有差

（本文は『源氏物語占注釈大成』による）

村上朝の応和三年（九六三）閏十二月、勅命によって飛鳥部常則が宮中に雪山を制作した。それはただの雪山でなく、当代きつての画師と画所の雑色役人たちの手による蓬萊山を象った雪の彫刻であった。

村上朝といえば、清少納言が漢句での即答を模倣した兵衛の蔵人の時代である。職御曹司の雪山制作も、村上朝に始まる雪山作りを意識することで、文化の発信源としての定子後宮の姿を世間にアピールしようとしたのだと考えられる。しかし、権力の後押しのない定子後宮に、村上朝のような高度な技巧を凝らした雪山制作を依頼する手立てはない。そこで、定子自身の威光を集められるだけの人員を招集し、大きさを誇る雪山を作ることにはしたのではないだろうか。

職御曹司に雪山が作られた十二月中旬は、折しも、二年前に定子の産んだ第一皇女脩子が着袴の儀式を迎える時期にあたっていた。『権記』によれば、脩子は十二月十六日に職御曹司から内裏に参入し、十七日に登華殿で着袴の儀を行っている。ちょうどその期間に東三条院詮子が内裏に滞在しているのは、孫娘の晴姿を見るためだろう。そこに母親の定子が同席することは叶わなかったが、これを機に定子の内裏参入が期待されており、女房たちにも定子後宮の存在を誇示し

たいという特別な思いがあったに違いない。つまり、職御曹司の雪山作りは、王朝文化を積極的に継承する定子後宮の価値を世間に知らしめ、その存在をアピールすることで、定子の内裏参入を促す狙いがあったものと推測する。

さて、ここで完成した雪山がいつ消えるかを賭ける余興を提案したのは、他ならぬ定子だった。女房たちがすぐさま反応して年内の期日をそれぞれ掲げる中、清少納言一人だけが翌年の正月中旬の期日をやや強引に予想した。雪山は消え残ったまま年が明け、年内に期日を予想した他の女房たちはすべて負けになった。残すところは清少納言の勝負の行方のみとなり、全員の注目が集まっていたところで定子の内裏参入が決まり、一同はしばらく職御曹司を離れることになる。

長保元年正月三日、『枕草子』のみが語る定子の内裏参入<sup>二一</sup>は、同年十一月七日の皇子誕生の結果となって表れる。一条天皇の第一皇子誕生は中関白一族が切望していた慶事だったが、一方、その直前の十一月一日に彰子を入内させ、政権掌握を狙う道長にとって最も歓迎されない事態だった。

当時の社会情勢の中で政治的に非常にセンシティブな事実を『枕草子』が書き記すには、相当な困難を伴うことは言うまでもない。それでも書き留めるにはどうしたらいいか、その解決策が雪山の賭けの余興に託された。そして、内裏参入の期日は賭けに即した日付の進行にうまく紛れて記されることになった。（表3参照）

その記載によれば、長保元年の正月、清少納言は三日に定子と共に参内し、七日に里下がりにしている。里に下がっている間に雪山の賭けの期日である一月十五日を迎え、雪が消失していることに落胆して再出仕したのが一月二十日。その時、定子は一条天皇と同席している。ここで定子の動静を確認すると、正月三日から二十日までの十七日間には内裏に留まり一条天皇と共に過ごしていたことがわかる。その間、同時進行していた雪山の賭けの結末についても考えてみよう。

が御簾を上げて定子に見せた雪景色はそれを象徴するものだった。女性の主体的な文化活動を先導していたのは、中宮定子その人だった。ただろう<sup>一六</sup>。

『枕草子』には、雪の降る夜、後宮女房たちが集まって取りとめもない話をする場面も描かれている。そこには宮廷ならではの女性同士の交流があり、時に文化的な会話も交わされていたと推測される。

また、雪のいと高う降り積もりたる夕暮より、端近う、同じ心なる人、二、三人ばかり、火桶を中にすゑて、物語などするほどに、暗うなりぬれど、こなたには火もともさぬに、おほかたの雪の光、いと白う見えたるに、火箸して灰などかきすさみて、あはれなるもをかしきも、言ひ合はせたるこそをかしけれ。

宵もや過ぎぬらむと思ふほどに、沓の音近う聞ゆれば、あやしと見出だしたるに、時々かやうのをりに、おぼえなく見ゆる人なりけり。「今日の雪をいかにと思ひやりきこえながら、何でふ事にさはりて、その所に暮しつる」など言ふ。「けふ来む」などやうの筋をぞ言ふらむかし。昼ありつる事どもなうちはじめて、よろづの事を言ふ。…〔二七四段〕

同僚女房たちと共に火桶をとり囲んで座り、火箸で炭を返しながら様々なことを語り合った時間は、清少納言の後宮における日常生活の一駒である。そこに登場する雪見舞いの男性は、初出仕の際に伊周が定子に対して引用した、あの「山里は雪降り積みて道もなし」の和歌を引いて語りかけている。そんな男性の訪問を受け応対する清少納言は、宮仕え当初は別世界と見えた後宮文化にすっかり溶け込み、自らその体現者となっていたのである。

#### 四、職御曹司の雪山

清少納言が憧れ同化した定子後宮の華やかな文化は、中関白道隆の

薨去で突然、色を失い、さらにその一年後に勃発した長徳の変により、風前の灯となってしまふ。それは清少納言の初出仕からわずか三年後のことだった。定子周辺が最も不穏な時期に、清少納言自身も一時、自身の進退を逡巡するが、結局、最後まで定子に仕える決心をした。その後、定子は一条天皇の第一皇子を産み、道長の圧力を受けながら辛うじて後の位置を保ち続けることになる。

このような中関白家の没落に関わる歴史的事実が『枕草子』に直接記されることはない。定子後宮の出来事を扱った章段群は、歴史背景から切り離され、作品内に時系列とは無関係に配列されている。そこには常に後宮の指導者であり続ける中宮定子の存在が描かれ、歴史的事実を直接見聞きし承知している同時代の読者に対して、定子がいかに変わらぬ姿で後宮文化を維持していたかを提示している。職御曹司を舞台とする章段群は、そんな定子の姿を書き留めた代表的なもので、その中で最も長い章段に、雪山の段がある。

師走の十余日のほどに、雪いみじう降りたるを、女官どもなどして、縁にいとおほく置くを、「同じくは、庭にまことの山を作らせはべらむ」とて、侍召して、仰せ言にて言へば、あつまりて作る。主殿の官人の、御きよめにまありたるなども、みな寄りて、いと高う作りなす。宮司などもまありあつまりて、言加へ興ず。三四人まありつる主殿寮の者ども、二十人ばかりになりにつる。〔八三段〕

長徳四年十二月中旬、京に大雪が降り、中宮定子が滞在する大内裏の職御曹司の庭で雪山作りが行われた。男性官人を動員して二十人ばかりで作ったというから、かなりの規模の雪山だったと推測される<sup>一七</sup>。大きな雪山はいつまでもつのか、雪山が消える日を賭ける余興が定子後宮で始まった。

すでに考証されているように、この章段では、歴史資料に残らない定子の内裏参入が雪山の賭けの背後で準備され、賭けの途中で実現し

高く上げたれば、笑はせたまふ。人々も「さる事は知り、歌などにさへうたへど、思ひこそよらざりつれ。なほこの宮の人にはさべきなめり」と言ふ。〔二八〇段〕

女房たちが炭櫃に集まって雑談している場所については、宮中とも職御曹司とも考えられており、この章段の記事がいつのことを扱ったのかは定まっていない。しかし、主題の所在は明らかで、最後の「なほこの宮の人にはさべきなめり」という一文に集約されている。これは、定子からの問いに反応し即座に御簾を巻き上げた清少納言の行動が後宮女房として相応しいものだという賛辞である。その賛辞は、単に機知ある行為に対してのものでなく、定子後宮女房の模範にすべきであるという評価だった<sup>10</sup>。では、この章段が書かれた意図について考えていこう。

『枕草子』には、雪の漢詩に関わる逸話として、次のような話が記されている。

村上天皇の先帝の御時に、雪のいみじう降りたりけるを、様器に盛らせたまひて、梅の花をさして、月のいと明かきに、「これに歌よめ。いか言ふべき」と兵衛の蔵人に給はせたりければ、「雪月花の時」と奏したりけるをこそ、いみじうめでさせたまひけれ。「歌などよむは世の常なり。かくをりにあひたる事なむ言ひがたき」とぞ仰せられける。〔二七五段〕

兵衛の蔵人という天皇側近の女官が村上天皇に詠歌を命じられ、即座に漢詩の一句を答えて褒められたという話である。兵衛の蔵人が引用したのは、『白氏文集』第五十五に載る「寄殷協律」の詩の一句「雪月花時最憶君」で<sup>11</sup>、これは設定された「雪」「花」「月」の景物に合致し、「最も君を憶ふ」で天皇への思いを暗に示す答えにもなっている。そして、この回答が折にあった秀句として、天皇から和歌よりも高い評価を得ている。

これと同様な趣向を、清少納言自身が一条朝で再現した章段がある。

殿上より、梅の花散りたる枝を、「これはいかが」と言ひたるに、ただ、「早く落ちにけり」といらへたれば、その詩を誦じて、殿上人黒戸にいとほくゑたる、上の御前に聞こしめして、「よろしき歌などよみて出だしたらむよりは、かかる事はまさりたりかし。よくいらへたる」と仰せられき。〔二〇一段〕

ここで清少納言が借用したのは、『和漢朗詠集』に載る大江維時の詩句「大庾嶺の梅は早く落ちぬ。誰か粉粧を問はん」<sup>12</sup>である。清少納言の返答を聞いた一条天皇は、並みの出来栄への和歌を無難に詠むよりも、その場に適合した漢句を用いて答えたことを評価している。それは、和歌より漢詩の方が勝るということではなく、折に合う即答が最も素晴らしいという見解であるが、兵衛の蔵人の逸話を重ねてみると、別の意味合いが生じてこよう。

天曆の治と仰がれる村上天朝で、漢句を答えて天皇の称賛を得た兵衛の蔵人の逸話を、一条朝で清少納言自らが再現する。そこには、女性が漢詩を使用することが公認される文化を継承し、積極的に喧伝しようという意図が含まれていたのではないだろうか<sup>13</sup>。

大歌人の子としての自負を持つ清少納言は、新しい文学創出の方法として漢詩を利用し、定子後宮で自己実現を果たしたものと考える<sup>14</sup>。始めに掲げた香炉峰の雪の段も、清少納言が漢詩を高度に利用する実例を示すと共に、定子後宮文化の気風を提示するものと解せられよう。それは、女性が漢詩・漢籍の知識を修得し、所作や趣向、あるいは和歌に改変して披露することを評価した、理知的で清新な文化であった<sup>15</sup>。

定子の母高階貴子は漢詩人として著名であり、中関白家一族は男女を問わず子供達が漢詩文に親しむ家庭に育ったと推測される。そのような環境で成長した定子だから、漢詩・漢籍は女性に必要ないとされていた当時の世間的常識に拘ることなく、理知的なアレンジを加えて使用する女性ならではの漢文化を作り上げたと考えられる。清少納言

るざりかくるるやおそきと、上げ散らしたるに、雪降りにけり。登華殿の御前は立部近くてせばし。雪、いとをかし。〔二七七段〕

ここに描かれているのは、生まれて初めて参上した宮廷で、これから主人と仰ぐ中宮定子の眩しさに圧倒され、緊張感に身動きもままならず言葉も発せられない清少納言の状況である。長い夜が明けて退出が許され、ようやく我を取り戻した清少納言、その目に飛び込んできたのが登華殿の庭の雪景色だった。外では雪が降り積もっているほど寒かったのに、それさえ感じないほど緊張していたのだ。定子との初対面の時の記憶が、宮廷の雪景色と共に作品内にくっきりと刻み込まれた場面である<sup>六</sup>。

その翌日、今度は定子の兄の大納言伊周が雪景色を背景に華々しく登場する。

大納言殿のまゐりたまへるなりけり。御直衣、指貫の紫の色、雪に映えていみじうをかし。柱もとにゐたまひて、「昨日今日、物忌に侍りつれど、雪のいたく降りはべりつれば、おほつかなきになむ」とぞ御いらへある。うち笑ひたまひて、「あはれ」ともや御覧ずるとて」などのたまふ御ありさまども、これより何事かはまさらむ。物語にいみじう口にまかせて言ひたるに、たがはざめりとおほゆ。〔二七七段〕

関白道隆の嫡子伊周は宮中でも平服を許されており、優雅な直衣姿で現れる。まだ二十歳そこそこの貴公子が身に纏う高貴な紫色の衣装が、真っ白な雪を背景に一段と引き立ち、まるで物語の主人公のようである。そんな伊周が、「山里は雪降り積みて道もなし今日来む人をあはれとは見む」〔拾遺集〕冬・平兼盛の一句を引用しながら中宮定子と会話を交わす光景に、新参者の清少納言は感嘆せざるをえない<sup>七</sup>。

宮廷に降り積もった雪を背景に浮かび上がって見えたのは、この世のものとは思えない物語世界のような情景だった。

白い雪に映える若い男性貴族の衣装については、次の随想段でも取り上げられ、さらに詳しく描写されている。

雪高く降りて、今もなほ降るに、五位も四位も、色うるはしく若やかなるが、うへの衣の色いときよらにて、革の帯のかたつきたるを、宿直姿にひきはこへて、紫の指貫も雪に牙え映えて、濃さまざりたるを着て、あこめの紅ならずは、おどろおどろしき山吹を出だして、からかささをさしたるに、風のいたう吹きて、横さまに雪を吹きかくれば、すこしかたぶけて歩み来るに、深き沓、半靴などのはばきまで、雪のいと白うかかりたるこそをかしけれ。〔二三〇段〕

五位や四位の上流階級の若者たちが身に着けている衣装の中で、特に紫色の指貫が雪に映えている描写が、伊周の登場場面と似通っている。華やかな色を身に纏って宮中に入出入りする高貴な人物を引き立たせる背景として、真っ白な雪景色が効果を発している。

宮中生活と結びつく雪としては、他にも、正月の除目の頃に任官申請の手紙を持って雪の中を歩く四位五位の貴族たちの様子〔三段〕「ころは」、宮中の細殿に雪や霰が風と一緒に入り込んでくる様子〔七三段〕「うちの局」などが描かれている<sup>八</sup>。『枕草子』の雪景色が宮中生活と結びつき、上流貴族世界と共に語られていくことを確認する時、冒頭段の冬の風景は、作品世界への導入部として機能していると改めて言うことができる<sup>九</sup>。

### 三、香炉峰の雪

『枕草子』の中で最もよく知られた章段に、香炉峰の雪の段がある。

雪のいと高く降りたるを、例ならず御格子まゐりて、炭櫃に火おこして、物語などしてあつまりさぶらふに、「少納言よ。香炉峰の雪いかならむ」と仰せらるれば、御格子上げさせて、御簾を

らえ、初出仕の段にその叙述の進化を指摘する<sup>四</sup>。また、津島氏は『枕草子』が実態以上の〈大雪〉を表現する場面に、〈雪と中宮と私〉を描く構図をとらえる<sup>五</sup>。本稿では、両氏が着目される、雪と宮廷もしくは中宮との関わりについて確認しつつ、『枕草子』の雪景色が提示するさらなる意味について考察していきたい。ちなみに、雪には早春のものも含まれており、必ずしも冬の景物に限定されないことを断っておく。

表1：四季の語の使用数

作品名	春	夏	秋	冬
(古今集：部立歌数)	(134)	(34)	(145)	(29)
古今集	71	8	108	7
後撰集	72	14	131	12
伊勢物語	14	2	16	1
源氏物語	119	21	130	11
枕草子	19	18	18	18

表2：雪月花の使用数

作品名	花	月	雪
古今集	146	28	39
後撰集	132	46	33
伊勢物語	23	12	9
源氏物語	273	201	86
枕草子	64	39	50

『日本古典対照分類語彙表』  
(2014笠間書院)による

## 二、宮廷で見た雪

まず、冒頭段「春はあけぼの」に記される冬の描写を見てみよう。冬はつとめて。雪の降りたるは言ふべきにもあらず、霜のいと白きも、またさらでもいと寒きに、火などいそぎおこして、炭持てわたるも、いとつきづきし。昼になりて、ぬるくゆるびもてい

けば、火桶の火も、白き灰がちになりてわろし。〔二段〕

冬にふさわしい時間として、寒さが最も身にしみる早朝を挙げるのは、「冬はいみじう寒き」〔二一段〕と啖呵を切る『枕草子』らしい選択である。冬の朝は雪が降っているのが最高にいいが、霜で白いのもいいし、そうでなくても非常に寒いことが条件で、その寒さを凌ぐために暖房の準備をする風景が、いかにも冬らしいのである。

春から秋まで自然の風景を取り上げてきた作者の筆は、冬で初めて人間を登場させる。雪の降り積もった寒い早朝、炭を急いで熾し持って来るのは女官だろう。火桶の炭火が昼時まで観察されている場所は宮中にちがいない。『枕草子』に描かれていく後宮生活の始まりである。

先に挙げた「降るものは」の段の続きには、雪の降る場所を特定して、「雪は、檜皮葺、いとめでたし」とし、また、「にげなきもの（不釣り合いなもの）」として、「下衆の家に雪の降りたる」〔四三段〕と記されている。『枕草子』が好む雪は、寝殿造りの檜皮葺の屋根に降る雪で、宮中生活と結びつく雪なのである。

清少納言が宮中で初めて目にした雪景色は、初出仕の思い出の中に記されている。

宮にはじめてまゐりたるころ、物のほづかしき事の数知らず、涙も落ちぬべければ、夜々まゐりて、三尺の御几帳のうしろに候ふに、絵など取り出でて見せさせたまふを、手にてもえさし出づまじうわりなし。：

：「いかでかは筋かひ御覽せられむ」とて、なほ臥したれば、御格子もまゐらず。女官どもまゐりて、「これはなたせたまへ」など言ふを聞きて、女房のはなつを、「まな」と仰せらるれば、笑ひて帰りぬ。物など問はせたまひ、のたまはするに、久しうなりぬれば、「おりまほしうなりにたらむ。さらばはや。夜さりはとく」と仰せらる。

## 『枕草子』の雪景色 — 作品生成の原風景 —

赤間 恵都子

### 一、『枕草子』の季節

冒頭句「春はあけぼの」が浸透しているためだろう、『枕草子』には春のイメージが付きまとう。しかし、冒頭段全体を思い浮かべてみれば、この章段が春だけでなく、四季すべての情景を平等に扱っていることは明らかであり、それが平安文学における『枕草子』の特徴ともなっている。

周知のように、『古今集』は季節の歌を重視し、春夏秋冬の巻を初めに置くが、その歌数において四季は平等ではない。『古今集』の歌が詠まれる季節は春と秋に集中し、夏と冬の歌は極端に少ないのである。試みに、『古今集』で使用されている四季の語の数を比較してみると、四季の巻の歌数と同じく、多い順に、秋、春、夏、冬となる。(表1参照)春の部立の全歌数に比して春の語の使用数が少ないのは、梅や桜などの春の花を詠むことで季節を表す歌が多いためである。四季の語の出現数の割合については、『古今集』と同じ傾向が『後撰集』にも、また散文の『伊勢物語』『源氏物語』にも見られる。それらの中で、『枕草子』だけは四季の語の使用数がほぼ同数であることが注目される。

『枕草子』が四季を平等に扱っていることについては先学の指摘があるが、一般的に平安朝文学であまり扱われない夏と冬を春秋同等に取り上げるのは、『枕草子』が好む風物と関係があるのではないだろうか。そこで、四季の中でも最も文学的な題材の少ない冬について

考えてみる。

動植物が眠りにつく冬に、唯一多く取り上げられる風物といえば雪である。雪は『古今集』の冬の部二九首中、二三首に詠みこまれていく。『枕草子』でも、「降るものは」で第一番に挙げるのが「雪」で、次に「霰」、そして「霰はにくけれど、白き雪のまじりて降るをかし」(二三三段)と続く<sup>二</sup>。また、三巻本系諸本逸文<sup>三</sup>には「本意なきもの(残念なもの)」という章段があり、「冬の雪降らぬ」という一文が記されている。これらのことから清少納言は雪を特に好んでいたと推察される。

そこで、古来、季節を代表する風物として掲げられる「雪月花」の、「雪」「月」「花」の語について、再び『古今集』以下の五作品における出現数を比較してみよう。(表2参照)

まず、五作品とも「月雪花」の中で「花」の使用数が最も多いことが分かる。特に『古今集』では、他の二語に対する「花」の使用割合の高さが際立ち、『後撰集』『伊勢物語』もそれに次いで「花」の使用割合が多くなっている。『源氏物語』では月の使用数が大幅に増える。それは、恋愛をテーマにした物語の主要場面が、月夜を多く扱っているからではないかと考えられる。一方、『枕草子』では、「雪」の使用割合が「花」に次いで多い。このことから、『枕草子』は冬の風物である雪を特に多く扱う文学だと言ったことができよう。

『枕草子』の雪を扱った先行研究には、最近のもので中田幸司氏、津島知明氏の論がある。中田氏は『枕草子』の雪に宮廷化の属性をと